

2014. 3 Vol.11

岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

CERA・PA

セラ・パ

〒507-0801 岐阜県多治見市東町 4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>

企画展報告

オールド大倉展

2014年度開催展覧会より

大織部展

エッセイ

国際陶磁器フェスティバル美濃 '14

教育普及活動報告

大地の子どもたち2014

開催に向けて

ギャラリーIIより[報告]

伊藤慶二展

コラム

炎の吉祥文様





国際陶磁器フェスティバル美濃'14

INTERNATIONAL CERAMICS FESTIVAL'14 MINO, JAPAN

2014年9月12日[金]～10月19日[日]

岐阜県の南東部に位置する東濃西部地域は、一千余年の歴史を有する国内屈指の陶産地として発展してきました。この地域で生産される陶磁器は『美濃焼』と呼ばれ、国内の和洋食器、タイル等の生産において高いシェアを誇っています。また、複数の人間国宝を輩出するなど、多数の陶芸家も陶磁器文化の担い手として活躍しています。

国際陶磁器フェスティバル美濃は、そんな東濃西部地域を構成する多治見市、瑞浪市、土岐市を会場として、『美濃焼』を世界に発信するとともに、陶磁器の国際的な交流を通じて、陶磁器産業の発展と文化の高揚に寄与することを目的に開催される、陶磁器の一大祭典です。1986年に第1回を開催して以来、3年に1度開催されてきました。そして、2014年の今年、第10回記念となる『国際陶磁器フェスティバル美濃'14』を9月12日(金)から10月19日(日)までの38日間を会期として開催します。

『国際陶磁器フェスティバル美濃'14』は「第10回 国際陶磁器展美濃」と「産業・地域振興事業」の2つが柱となっています。

1つ目の柱である「国際陶磁器展美濃」は、世界中の国と地域から陶磁器作品を募集し、寄せられた作品を世界的に著名な審査員に審査していただき、選ばれた作品を展示する展覧会です。その規模と質の高さから、イタリア、韓国、台湾のコンペティションと共に世界四大陶磁器コンペと並び称されています。第10回となる今回は、過去最大となる60の国と地域から、過去3番目の多さの2,579点もの作品が寄せられました。審査を経て厳選された約200点の陶磁器の未来を切り拓く作品を、セラミックパークMINOの展示ホールを会場として展示します。

もう1つの柱である「産業・地域振興事業」では、美濃焼や東濃西部地域の素晴らしさを発信するべく、様々な切り口のイベントを開催します。例えば、アール・ブリュット美濃展では、陶磁器の産地で生きる心身障害者の純粋な心の表現を、焼き物などのアートを通して鑑賞してもらう展覧会を開催します。この他にも、美濃焼を取り入れたテーブルウェアコーディネートのコンテストや、地元のタイルをあしらったテーブルで、地元グルメやスイーツを美濃焼に

盛り付けて提供するMINO TILE CAFÉなど、魅力的な催事を多数ご用意しております。

是非開催期間中に岐阜県東濃西部地域までお越しいただき、陶磁器の未来や、東濃西部地域の魅力に触れてみませんか？

(国際陶磁器フェスティバル美濃実行委員会 伊藤正人)

会期：2014年9月12日(金)～10月19日(日) 会期中無休
会場：多治見市、瑞浪市、土岐市(メイン会場)セラミックパークMINO

■総 裁 岐阜県知事 古田 肇
■会 長 多治見市長 古川 雅典
■総合プロデューサー 神谷 利徳
■主 催 国際陶磁器フェスティバル美濃実行委員会
■後 援 外務省、経済産業省、国土交通省、文化庁、
中小企業庁、特許庁 ほか

■催 事
□第10回 国際陶磁器展美濃
□食と器と音楽
□MINO TILE CAFÉ ～菓・器・喰・結・構～
□タイルを使ったインテリアデザインコンペ
□ルーキーコンペ
□レッドカーペット'14 ～美濃焼製品の品評&商談会～
□アヴァンギャルド展
□おおくて廃校プロジェクト「30の掌」
□アール・ブリュット美濃展
□ナイトミュージアム あかりアート展
□テーブルウェアコーディネート
□岐阜県立多治見工業高等学校専攻科 専攻科陶芸展
□ミステリーツアー など



国際陶磁器フェスティバル美濃'14 会場



《茶器》 駒井 正人 第9回国際陶磁器展美濃グランプリ



第10回国際陶磁器展美濃 ロゴマーク

オールド大倉の世界展

2013年9月7日～11月24日

皇室も愛した誇り高き日本の洋食器 公立美術館における初の大規模展

大倉陶園（横浜市戸塚区）は、日本の陶磁器メーカーの草分け的存在である日本陶器（現ノリタケカンパニーリミテド）の創設メンバーであった、大倉孫兵衛・和親父子によって、量産品としてではなく、美術工芸品としての磁器製品づくりを目標として、1919年（大正8）に創設されました。品質や芸術性の高さを追求した美しい磁器製品は、「セーヴルのブルー、大倉のホワイト」と称賛され、皇室をはじめ多くの人々に愛されてきました。

大倉陶園のあゆみの中でも創業の地蒲田を本拠地とし、開窯から終戦までの25年間に製作されたものは、「オールド大倉」と総称され、その品質の高さや稀少性から大変高く評価されてきました。しかし、こうした初期の製品は、特別注文品や贈答品などが多く、これまで総覧することが叶いませんでした。

本展覧会では、個人コレクターのご厚意により、貴重なオールド大倉製品を一堂にご出品いただける運びとなりました。また、株式会社大倉陶園をはじめ関係各位のご協力により、公立美術館における初めてのオールド大倉展が実現いたしました。

戦前の大倉陶園では、「良きが上にも良きものを」の精神の下、採算を度外視した妥協のない製品づくりが行われていました。そこで本展覧会では、大倉陶園が用いていた様々な技法に焦点を当て、同園の革新性に迫りました。本焼成と同じ温度でイングレイズを施すことにより独特の効果を生み出す岡染めや、同様にイングレイズによる瑠璃など大倉陶園独自の表現をご紹介しました。また、染付や漆器に用いられる蒔絵を応用した漆蒔など、日本の伝統的な技法による洋食器への応用例も多数展覧しました。さらには、これまでまとまったかたちで紹介されることのなかった陶彫製品を展示することにより、同園の多彩な創作活動をご覧いただけたものと思います。

展覧会会期中には、美術史家の井谷善恵氏による講演会を開催し、大倉陶園前史とも言える日本陶器における大倉父子の取り組みや、その美意識の源泉についてご講義いただきました。また、陶芸家の徳田吉美氏には、漆蒔の実演を行っていただきました。



《色蒔金彩デミタスセット》昭和9年 個人蔵

漆蒔ならではの表現や施す際の苦労などをお話いただいた他、大倉陶園の漆蒔作品についても解説していただきました。

戦前の日本において、これだけ高品質の洋食器が製作されていたという事実は、展覧会をご高覧くださった皆様に少なからぬ衝撃を与えたものと思います。大倉陶園は、1944年（昭和19）の戦災により工場の大半を焼失したため残された資料は限られており、戦前の大倉陶園史にはまだまだ不明な点が多くあります。今後も調査を継続してゆくことにより、大倉陶園の歩みをさらに明らかにし、誇り高き日本の洋食器の魅力を多くの方にお伝えしてゆきたいと思っています。



《魚置物》昭和10-20年 個人蔵



《岡染付風景エンボス皿》昭和10-20年 個人蔵

- 会 期 平成25年9月7日（土）～平成25年11月24日（日）
- 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
- 主 催 岐阜県現代陶芸美術館
- 共 催 中日新聞社
- 特別協力 株式会社大倉陶園
- 観 覧 料 一般800円、大学生600円、高校生以下無料
- 関連企画 講演会「日本の近代陶磁器を生み出した親子―大倉孫兵衛・和親親子の美意識について」
9月22日（日）14：00～15：30
講師／井谷善恵（美術史家）会場／プロジェクトルーム
漆蒔実演
9月15日（日）11：00～／14：00～
講師／徳田吉美（陶芸家）

古田織部400年忌 大織部展

平成26年は、岐阜県出身で武将茶人として知られる古田織部の400年忌にあたります。織部は武将として織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三代にわたる天下人に仕えるとともに、千利休の高弟として独自の茶道を創案し、陶磁器をはじめとする茶道具などに新たな価値観をもたらしたことで広く知られています。

これまで、古田織部という人物に迫った展覧会はほとんどおこなわれていません。それは、織部に関する確かな歴史資料が乏しいことに関連しているものと思われます。一方で、その真偽は別として、織部にまつわる豪快な逸話は幾つも残されており、興味につきない存在といえます。近年では漫画の主人公となって、滑稽でありながら、ときに鋭い審美眼を披露したりする奇想天外な様子が随所に描かれています。さらにはテレビアニメも放映され、お茶の間でも親しまれるまでになっています。

他方で、陶磁器としての織部を大きく取り上げた展覧会は、まず1997年に岐阜県美術館で開催された「織部—いわゆるオリベイズムについて」が挙げられます。この展覧会では、織部焼に描かれた斬新な文様と、同時代の辻が花や蒔絵との関連性などが仔細に語られています。さらには、ボストン美術館やフィラデルフィア美術館といった海外での美術館で収蔵されている織部焼を里帰りさせてもいます。他にも、土岐市を中心とする産地や畿内の消費地において、織部焼を含んだ発掘の成果を示す展覧会も数多く開催されてきました。これらによって、従来の織部焼を含む美濃桃山陶の年代観が見直され、新たな史実なども数多く発表されています。

本展覧会では、このような状況を踏まえながら、激動の時代を生き、天下人の茶道指南役となった古田織部の生涯と、美濃焼をはじめ全国の窯場に広がった織部焼や同時代の陶磁器についての二部構成によって、従前とは異なる「織部」を紹介します。

第1部 古田織部の生涯

古田家は、大坂夏の陣で豊臣方に内通した疑いで、織部自身やその子などが切腹させられているため、関連する資料は必ずしも多くありません。こうしたなか、織部所持とされている茶道具には、その豪放さが感じられる様々な由来が伴っています。たとえば、「古伊賀水指 銘破袋」（五島美術館蔵）について織部は、「おおきなひび割れがありますが、それも一種の趣でしょう。今後はこれほどのものはないと思います」と普通であれば欠点である部分を、逆に見どころとしてとらえています。また、織部所持とされる「井戸茶碗 銘須弥（別名十文字）」（三井記念美術館蔵）は、大ぶりの茶碗を割って、十文字に継いで手ごろな大きさにしたという、にわかに信じがたいような言い伝えがあります。

本部門では、古田織部が所持、あるいは何らかのかかわりをもった様々な茶道具をはじめ、自身の消息などにより、武将としての織部、そして茶人としての織部の生涯を再構成します。

第2部 織部と同時代の陶磁器

美濃で桃山時代に作られた「織部焼」は、古田織部にちなんで後世命名されたものであって、彼が生きた同時代の呼称ではなく、文獻的にも美濃焼との結びつきを証明するものは、ほとんどありません。一方で、博多の豪商だった神谷宗湛の宗湛日記に記されている慶長4年2月28日に伏見でおこなわれた古田織部の茶会について、「ウス茶ノ時ハ セト茶碗 ヒツミ候也 ヘウケモノ也とあります。すなわち織部は薄茶のときに歪んだ茶碗を使用したと言っており、この「へうげもの」といわれた茶碗こそ、黒織部などの美濃焼ではないかと推測されています。さらには西日本諸窯で生産された同時代の作品にも織部と類似する傾向が見られます。

本部門では、左右非対称な形状に斬新な絵付け、鮮やかな緑や漆黒の黒をまとった織部をはじめとし、それに先行する黄瀬戸、瀬戸黒、志野などの美濃桃山陶について、近年の窯場や畿内などの消費地における発掘調査の成果などを踏まえつつ紹介していきます。また、伊賀、信楽、備前、萩、さらには唐津、上野、高取、八代など九州諸窯や高麗茶碗も含め、古田織部と同時代の桃山時代後期の名品を一堂に会し、これらの関連性を含めた、この時代の陶磁器の特質を検証したいと考えています。



古田織部座像 安政2年（1855）名古屋城蔵

古田織部

古田織部は天文13年（1544）に美濃（現在の岐阜県本巣市）で生まれ、名は佐介といいました。永禄3年（1560・17歳）のときに使番として信長に仕え、同12年（1569・26歳）に摂津茨木城主中川清秀の娘せんをめとります。天正6年（1578・35歳）に荒木村重の乱で政略に奔走し、同10年（1582・39歳）には中川清秀とともに山崎の合戦に参加するなどし、同13年（1585・42歳）武功がみとめられて従五位下織部正に叙せられ、山城国西の岡、3万5千石の大名に列せられました。慶長3年（1598・55歳）の秀吉没後は所領を子の重広に譲り、自身は茶事に没頭する生活に入ります。慶長15年（1610・67歳）には江戸城で二代将軍徳川秀忠の茶の湯の指南役をつとめます。しかし、慶長20年（1615・72歳）大坂夏の陣に際し、謀反を理由に伏見の屋敷に幽閉され、6月11日に子の重広とともに自刃します。

- 会 期 平成26年9月6日（土）～ 平成26年10月26日（日）
- 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
- 主 催 大織部展実行委員会（岐阜県現代陶芸美術館・公益社団法人美濃陶芸協会・中日新聞社）
- 共 催 NHK岐阜放送局（予定）
- 特別協力 徳川美術館
- 開館時間 午前10時～午後6時（入館は午後5時30分まで）
- 休 館 日 月曜日（月曜日が休日の場合は翌平日、国際陶磁器フェスティバル美濃会期中は無休）
- 観 覧 料 一般800円（700円）、大学生600円（500円）
国際陶磁器フェスティバル美濃との共通券（金額未定）
高校生以下無料、（ ）内は20名以上団体料金
- 関連企画 岐阜県現代陶芸美術館プロジェクトルームほか（内容未定）
- ギャリートーク 毎週日曜日、午後1時30分より学芸員によるギャリートークを行います。



志野茶碗 銘振袖 桃山時代
東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives



織部獅子鈕香炉 慶長17年（1612）
東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives



古田織部画像 文化3年（1806）
大阪城天守閣蔵

こどもたちと美術館をつなぐために

「大地のこどもたち2014」展の開催に向けて

大地のこどもたち2014

- 会 期：2014年7月26日（土）～8月27日（水）
- 会 場：岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーⅡ
- 時 間：10：00～18：00（入館は17：30まで）
- 休 館 日：月曜日
- 観 覧 料：無料
- 主 催：岐阜県、岐阜県現代陶芸美術館、大地のこどもたち展開催委員会
- 後 援：岐阜県教育委員会、多治見市教育委員会、土岐市教育委員会、瑞浪市教育委員会

こどものつくったやきもの作品には、何とも言えないあたたかみを感じられます。土による表現だからこそ、こどもの思いがストレートに表れ、さらに、焼成されることにより土の変化による魅力が加わり、エネルギーは力を増します。そのエネルギーは作品から溢れ出し、みる人の心の中にも伝わってきます。

そんなエネルギーあふれるこどもたちのやきもの作品を展示する大地のこどもたち展は、2005年から始まり、3年に一度の開催をしています。この展覧会では、約900点もの岐阜県内の小学校や中学校、特別支援学校等でつくられたこどもたちのやきもの作品を展示し、その魅力を皆様に紹介します。

前回の「大地のこどもたち2011」展では、35校、951点の出品があり、鑑賞されたお客様から、このような感想をいただきました。

- ・子供ひとりひとりの感性が伝わってきて、とても感動しました。
- ・今まで見た芸術作品の中で一番スリルがありドキドキした。どうしたらこんなものをつくれるのか、素晴らしい。
- ・展示する事で多くの子供達の励みになると思います。これからも、出来るだけ多くの作品を展示してください。

このようなお客様の声にも後押しされ、「大地のこどもたち2014」展で、4回目を迎えられることに喜びを感じています。ぜひ、多くの方に今回の展覧会も見えていただき、感動を味わっていただきたいと思っています。

また、この展覧会では、学校の教員と美術館職員による開催委員会を組織し、テーマ選びから展示の計画、展示まで連携してつくりあげています。広く県内の作品を発表し、鑑賞し合う場を提供することで先生方にとってもよい交流の場となることを期待しています。ぜひ、研修会等でもご活用ください。

（岐阜県現代陶芸美術館課長補佐 有賀雅美）



伊藤慶二展 ―ペインティング・クラフト・フォルム―

平成25年8月10日(土)～平成26年1月13日(月・休)

本展では岐阜県土岐市で制作を続ける伊藤慶二氏(1935-)の表現の世界を、3つの展示室を使い、「ペインティング」「クラフト」「フォルム」の3つのテーマごとにご覧いただきました。「ペインティング」の展示室では、絵画部に所属した高校時代の油彩画から最新作の「道」をテーマとする油彩画まで、会期中約50点の絵画が壁面を飾りました。美術学校時代に描いた20代の裸婦のクロッキーや仏画を含め、伊藤慶二氏の絵画がこれほどまとまって紹介されたのは初めてのことでしょう。この展示室では新シリーズが発表されました。「道」をテーマとする油彩画と「NAGASAKI」シリーズの作品です。ライフワークとなっている「HIROSIMA」シリーズに加わるように、新たに始まった「NAGASAKI」シリーズの作品は、油彩画とドローイング、そして布に陶のマスクを並べた作品《天使のマスク》と、絵画と造形の作品で発表されました。《天使のマスク》は一つの型から生まれた25点の様々な表情をみせる陶のマスクが白布の上に並ぶ作品です。伊藤氏によれば、これも若い頃に器作りでやきものの技術を学び、器を型で成形する方法を習得したところから生まれた作品だということでした。

本展ではこれらの作品の発表のほかにも、伊藤氏にとって、または当館にとって、いくつかの「初めて」となる試みがありました。

「クラフト」の展示室では、細長い展示室の形に沿って展示ケースをほぼ一列に、当館でこれまでケースを置くことの多かったガラス窓側と反対側の位置に並べました。伊藤氏と相談しながらの実験的試みで、昼間は展示ケースのガラスに窓からはいる屋外の風景の映り込みがあったりもしましたが、鑑賞の際、外光が順光となって新鮮な展示となりました。

作品をいかに並べるかという展示計画を伊藤氏の案にそってつくりあげた本展会場ですが、とりわけ最後の「フォルム」の展示室は、その展示空間全体も作品といえるでしょう。伊藤氏の指示のもと17体の陶の胸像や顔の作品が、それぞれ位置をずらし、高さや

向きを変えて並べられ、展示室の半分を埋めました。そして群像としての力が新たに生まれました。この展示室全体の空間を一人の作家につくりあげてもらうことも当館にとって初めてのことです。しかも天井まで約12メートル近くある吹き抜けを使って展示された《珠》(前期展示)、《尺度》(後期展示)の作品は、この展示室を活かした作品出品をお願いしていた当館からの要望に、まさに応えてくれた作品です。両作品とも鏡を床面に敷き、鏡に映る作品が吹き抜けの高さや空間をより強調した、特別な空間を出現させました。

本展では展示替えした分も含め計108点が出品され、展覧会場はまさに伊藤慶二ワールドとなりました。また伊藤氏の作品は本展と同時に開催していた「日根野作三と薫陶を受けた7人」にも出品しており、多くを学んだという師・日根野作三氏との関係とともに伊藤氏の世界を紹介する機会にもなりました。

会期中に78歳を迎えた伊藤慶二氏。ますます湧き上がるその創造の精神は私たちに驚きを与え、さらに次へ向かって作品を生み出しています。

(岐阜県現代陶芸美術館
学芸員 佐野素子)



「フォルム」の展示室(手前は《尺度》)

展覧会スケジュール

	2014.4	2014.6	2014.8	2014.10	2014.12	2015.2	2015.4
ギャラリーⅠ	デミタス コスモス 宝石のきらめき☆カップ& ソーサー 3月8日—6月22日		フランス印象派の 陶磁器 1866-1886 ジャポニズムの成熟 7月5日—8月24日	大織部展(仮) 9月6日—10月26日	みて・きいて・かんじる 陶芸 11月8日—3月15日		
ギャラリーⅡ	ラテン! 1月25日—6月22日		岐阜県 美術展 7月5日—13日	大地のこども たち2014 7月26日—8月27日	大織部展(仮)関連企画 9月6日—11月9日	象るかたち 荒川豊蔵・武夫展 SCENE:20世紀の陶芸 11月22日—	

炎の吉祥文様

板谷波山の延年紋様について

近代陶芸を先駆した巨匠板谷波山が好んで用いた文様の一つに、波山名付けるところの「延年紋」あるいは「延寿紋」がある。これはいずれも吉祥をあらわす桃と霊芝をそれぞれ器体の前後両面に配する組み合わせモチーフである。桃は「仙桃」「寿桃」とされる中国の伝説的な桃のことで、三千年にして花を開き、三千年にして実を結ぶという不老長寿をもたらす果実である。また霊芝とはサルノコシカケ科の万年茸の漢名で、中国の伝説では為政者の徳が高く善政を成せば生ずる瑞祥であり、食すれば長寿を保ち、羽化登仙即ち仙人となつて天にも上るとさえられる頗る吉祥の瑞草とされる。

この吉祥のモチーフを組み合わせた波山による延年紋の作例は少なからず知られているが、その中にきわめて特異と思われる霊芝文の意匠がある。それは霊芝が緋色の火焰に包まれているというものである。その波山作とは「大正辛酉秋初大吉日」（大正10年）と箱書にあり、当館に寄託されていた（現在は寄託解除）「彩磁延年紋様花瓶」であるが、火焰のない多くの霊芝文の作例に対し、ひと際異彩を放ち、かつ存在感を示すものであった。

因みに細部は微妙に異なるが、文様構成など本作に酷似した延年紋の拓本とその一部を素描に起こしたものが波山の「模様集第三巻」にある（『板谷波山素描集 第五巻』no.663,664）。波山は自作を拓本として記録することがあり、同様の拓本は素描集の他の箇所にもある。この延年紋の拓本には「生素地胴径八寸三分高九寸五分」とあることから、焼成による収縮を勘案しても本作とやや寸法の異なる延年紋の作例があったと考えられる。

筆者の実見していない火焰に包まれた霊芝の波山作がまだ存在する可能性はあるが、おそらく古例にも尋ね得ないであろう、この意匠は、波山の作例でもやはり特異なものであったと思われる。

霊芝文の古例については、「元磁にみられる霊芝文について」（蘭山康彦、『陶説』no.226,227）という興味深い研究がある。この蘭山論文によれば、やきものの装飾図案として霊芝が新たに登場したのは元時代からであり、霊芝は元朝の圧政下、中国民族が中華の誇りと伝統を保守し、その回復を祈念するという精神的背景をもった象徴で

はなかったかという。また本論では、青花磁を中心に例品をあげ、霊芝文を三群に分類している。「すなわち、元曲や漢代故事の一場面やその背景の中の植物群の一として描かれたり、中国古来の霊獣や霊鳥と共に描かれているもの（A群）、歳寒三友文と共に描かれているもの（B群）、道教に関係した文様のとりあわせの中に、雑寶の一として描かれたもの（C群）である。」（『陶説』no.227, p.11）

蘭山論文や文様集等を参照しても火炎に包まれた霊芝の意匠はなく、こうした例品は認められないが、では何故このような文様が波山によって描かれたのであろうか。実は大正10年10月の波山会に出品されたという本作に先立つ大正8年に、火焰の意匠が施された作例がある。



板谷波山《彩磁延年文花瓶》1921年

「葆光彩磁細口菊花帯模様花瓶」（出光美術館蔵）がそれで、荒川正明氏が指摘しているように、この意匠は、法隆寺夢殿の救世観音の光背をヒントにしたものであり、「模様集第二巻」にある「法隆寺夢殿観音背光ノ内」と記したスケッチによって、波山の極めて巧みな翻案がもたらしたものであることが知られるのである。東京美術学校彫刻科の同期であり無二の親友であった新納忠之介が日本美術院の国宝修理部門の責任者であったことから、こうした法隆寺調査などの古典研究も可能であった。そしてこの救世観音が掲げる持物である火炎宝珠も波山にとって印象深いものであったのではないか。その宝珠は正しくは如意宝珠と呼称し、如意とは意のままに願いを叶える意と共に先端（如意頭）が雲形をなす法具の一でもある。またその雲形は霊芝に相似しており、波山の蔵書にあった『吉祥図案解題』（野崎誠近、但し昭和3年初版、昭和15年再販）にも「如意は霊芝を象り霊芝は又吉祥の瑞草なるが故に両者は相混用す」とある。推論であるが、波山は法隆寺調査を経たのち、救世観音の持物・火炎宝珠に想を得て、霊芝を如意宝珠に見立て、火炎に包まれた霊芝文を創案したのではないか。また過去の霊芝の意匠の例品にも、霊芝が堂々と主役として配されることは稀であった。ここにも波山の翻案の独創性の一面を見出すことができると思われる。

（岐阜県現代陶芸美術館副館長 渡部誠一）

電車でのアクセス

東京・大阪方面→名古屋駅でJR中央本線に乗り換え
JR中央本線多治見駅からは

- ・タクシー 所要時間約10分
- ・多治見市コミュニティバス 小泉ルート 所要時間約25分「セラミックパークMINO」下車（土・日・祝）
- ・東鉄バス「瑞浪駅前」行き、「妻木」行き「セラパーク・現代陶芸美術館」下車 徒歩約10分

お車でのアクセス（駐車場無料 一般車312台収容）

- ・東名高速道路・名神高速道路 →小牧IC経由で中央自動車道へ
- 中央自動車道多治見ICから国道19号を土岐・中津川方面に約5km、東町1の交差点を右折
- ・東海環状自動車道土岐南多治見ICから約5分

岐阜県現代陶芸美術館

Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
TEL 0572-28-3100 FAX 0572-28-3101
URL <http://www.cpm-gifu.jp/museum/>

開館時間
午前10:00～午後6:00（入館は午後5:30まで）

セラ・パ vol.11 2014年3月発行
編修・発行／岐阜県現代陶芸美術館

※無断転載を禁止します